

浮遊と沈殿

(20170722-20180108)

大村伸一

これから書かれるあれこれは、誰にとっても興味深い話であるとは限らない。むしろ誰一人にも興味を抱かれない話題になるかもしれない。おそらく、幾人かは興味を持ちながらも結局は読み始めることさえないということになるのかもしれないし、あるいは興味の有無には関係なく読み始めはしたが読み終えるには至らなかったということもあるだろう。まったく興味はないのだが、何度も読み始めそしてたんねんに読み続けそして運良く読み終え、幾度も繰り返し読んだあげくあまつさえ正誤表を作ってしまったというような誰かがどこかにいることになることはないだろう。

そのように興味を持たれない文章に意味があるのだろうかとか誰かが考えるかもしれない。さらにまた、意味があることに意味があるのだろうかとかさえ、また別の誰かが考えることになるのかもしれない。もちろん、それが同じ誰かである可能性もないわけではない。だがそのような疑問を誰が考えるというのだろうか。意味があれば書かなくてはならないという決まりはないように、意味がなくても書かれる文章は確かに存在する。とはいえ、ここにこれから書かれることになるあれこれは、偶然に何の必然性もなくたまたまここに書かれていたというだけのことなのかもしれない。それもまた大いにありうるだろう。あるいはまた、何故そのようなものを、つまり誰一人興味を持たないようなものを書くのかという非難あるいは苦情のようなものが生まれることもあるかもしれない。そんなことはないだろう。よく考えればそのような心配の必要がないことは明らかである。そのような心配とは、非難や苦情が生まれるのではないかという心配のことだが、書かれた文章はそこに書かれているだけであり、たまたま書かれていた文章が意に染まないことを理由に非難する誰かは、結局その文章を読んでいないのである。誰も自分の気に入らない文章を読むことはできないからである。まして、誰に苦情を伝えるというのだろうか。誰も興味を持たず誰も読まないような文章が、いったい誰に苦痛を与えられるのか。それも分からずにどうやって苦情を伝えることができるだろうか。苦情はそれを考えた誰かの中にだけ存在し、失われていく。そのような苦情が生まれたのかどうかは誰にも分からない。これらの事情をすべて考慮すれば、いずれにせよ、つまり意味があろうとなかろうと、だからといってこれらのあれこれを書かないという理由にはならないのである。

同じように誰も興味を持たず誰も読まない文章が果たして存在していると考えられるものなのかどうかについては、いずれ誰かの話題になるかもしれない。そのような文章を想像することはできるが、その具体的な文章を思い出したり、書き表したりすることができないからだ。それは話題になりやすい。あるいはそれと同じ程度には話題にされることもなく忘れられやすい。それというのは話題にされやすい程度のことである。

それは手紙ではないかと思った。誰が思ったのかははっきりとしない。書いた者が思ったのか、読み上げた者が思ったのか、そのような様子をながめていたものが思ったのか、あるいは何も関係のない誰かが不意に理由もなくそう思ったのか、それははっきりとしない。とはいえ、手紙であれば受け取った誰かにとっては興味深いだろうしまた、その手紙を運ぶことをなりわいとするような者にはすこしも興味が湧かないだろう。というよりも、その場合、運んでいる手紙の内容について興味を持つことは禁じられているのである。だとすれば、これから書かれるあれこれは手紙であるのに違いない。誰が書いた手紙なのかはまだ分からない。誰に宛てた手紙なのかはまだ分からない。手紙を運ぶことになる誰かに支払われる代金が幾らになるのかはまだ分からない。これこそ、その手紙こそがこれから書かれるあれこれであることの証拠になるはずだ。それに、そのような手紙であれば、どれだけ繰り返し読まれたとしても、正誤表を書くものなどいはいはない。手紙には正も誤もないからである。

さて、これまでも再三ほめかしてきたように、今、これを書いているのが私であるとは限らない。それは誰もがすでに知っていることだ。むしろ、いくらかでも論理性を失わずにいられたならば、誰も私が書いているなどと考えるはいないだろう。これまでもこれからも誰も考えはしなかったししないだろう。誰が書いているかなど気にする者などいないということだ。万が一誰が書いているかが話題になったとしても、そもそも私が書いているなどと、何故考えることができるだろうか。いったい誰がどのような経緯で、私が書いている可能性があるなどと思いつくだろうか。何かを書きながら同時に別の何かを書くということは誰にもできはしないだろう。たとえ主語が二つあったとしてもそんなことはできはしない。もしも私が書いているのであれば、結局はそういう話になるのである。それよりも、誰かが書いている文章をその傍でぼんやりと眺めている者こそが私であるような気がする。時には読み上げもするが、書いている者の邪魔にならないように大きな声は出さないだろう。声などまったく発せずただ読んでいただけだとは考えられないだろうか。それはいかにもありそうな話ではないだろうか。とはいえ時々、書いている者に間違いであるとか意見の相違について語り掛けたいと思うかもしれないが、そう思うことはないだろう。何故なら、書いている者は間違えないし、私には書かれている事柄について特別な意見がないからである。

ここまで、これから書かれるあれこれについて書かれて来たのだが、ここはもう充分にそこで言われているこれからであるように思われる。冒頭でこれから書かれると書いて以来ずいぶん多くの文が書かれた。だとすれば、ここはもうとっくに冒頭におけるこれからになっているはずだ。にもかかわらず、ここはそのこれからではなく、つまり冒頭の文章からここまで何一つ変わっていないなどということがあるだろうか。そうであるような気がしてならないのである。もしそうならば、冒頭からここまでに書かれた文章には、まさしく意味などなく、それゆえこれらはこれからなどではなかったということになる。意味とはどういう意味なのかはいずれまた誰かが話題にするだろう。だとすると、これまで書かれて来たことがらが手紙なのかどうか、そろそろ吟味してもよい頃かもしれない。これまで書かれて来たあれこれが、冒頭でこれから書かれるであろうと予言していたあれこれであったとするならば、冒頭からここまでに手紙らしい文などひとつもなかったように思う。だとすれば、冒頭でこれから書かれるあれこれと言っていたものは実は手紙ではなかったのではないだろうか。早急に結論を出すのはやめよう。冒頭におけるこれからがここまでの文章ではなかったという可能性さえまだ残されている。それだけではなく、もしも冒頭からここまでの文章が冒頭におけるこれからであったとして、そこに手紙らしい文がひとつもなかったからといって、だからといってこれが手紙ではないとは言えないことは明らかだ。というのも、手紙の配達係のように読むべきではない者には意味をなさなくても、書き手と宛先の誰かににとっては意味のあるような、いわゆる暗号が使われていたのかもしれないからだ。先にも書いたように、これを書いているのは私ではなく、これから書かれるあれこれを書くのも私ではありえない。だとすれば、私はこれらの文章を読んでいるとも言い難い。読んでいるのは間違いなく他の誰かであり、私はそれに関与していない。もしも私が読んでいるのであれば、これらの文章によって私の行動は影響を受けそれまでの私とは異なる生き方をするはずだが、私にはそのような変化が一向に見られないからである。ために、冒頭からここまでの文章を何度か読み返してみられるとよい。私の語ったあるいは書いたとされるような文章を含めすべての文章は、幾度読み返しても一文字も変わらず同じである。違う文章違う文字に変わるなどないことがわかるだろう。そうであれば、私はこれらの文章によって何も変化することがないのであり、何も変化することのない私が何かを読んでいるとは言い難いのではないだろうか。だとすれば、私は書くこともせず読むこともせず、ただこれらの文章と渾然一体となった何者かなのだろうか。そうであると考えしかあるまい。だとすれば、言いかえれば、私はこれらの文章そのものであると言ってもあながち間違いではないことになる。勿論、これらの文章に誰かの生き方をねじまげてしまえるほどの力がないというだけのこともかもしれない。そうなのかどうなのかはまだ明らかではない。

さて、暗号で書かれた文には、己が暗号で書かれているということがわかるものだろうか。私には分らない。四文字ずつとばして読むとか、素数番目の文字だけを続けて読むとか、あるいはいったん文字を惑星軌道になぞらえたあとで再びそこからありふれた文字を読み取るであるとか、あるいは鏡に写した文章と重ね合わせたときに一致しない文字が干渉することでそこに浮かび上がる文字を読むとか、そのような試みは何も明らかにしない。そのような試みによって意味の通るような文章が生まれないからである。おそらく暗号ではないのだろう。文というものは、自分が何か特別な存在であると思ひ込みたいがためだけに自分は暗

号だと信じたくなるものだ。そして多くの場合、それは暗号ではない。私は暗号ではなく、暗号でありたいとも思わない。つまり私は文章ではないということなのだろう。それとも、これから書かれるあれこれとは結局手紙ではなかったということなのだろうか。暗号にする必要もないようなありふれた文章だったのだろうか。手紙でなければいったい何だということなのだろうか。信じられないことではあるが、これらのあれこれらは暗号で書かれた手紙であり、手紙を書いてもおらず受け取ることもない私にはその意味が理解できていないというだけなのかもしれない。それはいかにもありそうな話である。

これから書かれるであろうあれこれ、あるいはこれまで書かれてきたあれこれを書くことになったり書いてきたりした者はおそらくどこにもいないだろう。もしも探そうとしたところでどこにも見つけ出せないだろう。あるいは自分が書きましたと誰かが訴え出たとしても、それを証明することは困難である。書いているその場に目撃者がいれば証拠になるだろうか。そうとは思えない。そもそもその目撃者はいったい何を目撃したというのだろうか。誰も書いている者を目撃できない。書いているように見えたとしても、それがただ書いている真似をしているだけであれば、それは書いているとはいえない。もし文字を書いていたとしても、それがどこかで見た文章を思い出して書き写しているだけであれば、それは書いているとはいえない。そもそも、いったい誰が文章を書くというのだろうか。誰も文章など書きはしない。誰かが存在しない何かを空想しそれに文字をあてはめて書き留めるなど、そんな都合の良いことがこれほどの頻度で起きるものだろうか。誰も何も書いてはいないのである。書かれているとかこれから書かれるであろうとかいう言葉は故に何も意味しない。言葉は偶然に出現し、そして漠然と忘れられていく。それだけのことである。これまででもあるいはこれから書かれるであろうあれこれも、ただの現象であるということだ。これこそが誰にでも納得のできる説明であるといえるだろう。

だとすれば、それは手紙などではなく報告書ではないかと思った。相変わらず誰が思ったのかははっきりとしない。書いた者が思ったのか、読み上げた者が思ったのか、そのような様子をながめていたものが思ったのか、あるいは何も関係のない誰かが何も関係のないあれこれに気づいて不意にそう思ったのか、それははっきりとしない。おそらく報告書の提出を義務付けられた誰かなのだろう。報告書の提出を求められたとき、日付と氏名と時系列に沿った記述は必須であると言われていた。文章というものはすべて時系列に沿った文字で書かれているのだから、時系列に沿った記述であることは何も特別なことを意味しない。しかし、日付と氏名はそうではない。報告書は特定の誰かが特定のある日に書いたものではあってはならない。誰がいつ書いたとしても同じ内容にならなくてはならないからである。これから書かれるあれこれはまさにそういうものではないだろうか。冒頭からここまで書かれたあれこれはまさにそういうものではないだろうか。だとすれば、これから書かれるあれこれは報告書でなくてはならない。報告書を運ぶ誰かは報告書を書いたものか、あるいはそれを受け取ったもの以外にはありえない。だから、報告書を運ぶ無関係な誰かが誤って読んでしまうということも起きるはずがない。そのため、暗号にする必要はなく、それを知っている報告書の文章には暗号になろうという熱意はみられない。報告書というものは報告書を受け取る誰かの特定の目的のために書かれるのだから、報告書の最初から最後までどの文章も受け取ったものにとって興味を抱かずにはいられない内容になっている。何かの手違いがあった場合のみ、報告書を受け取った誰かが、報告を依頼した誰かではない場合のみ、その誰かは報告書の内容にはまったく興味を持たないかもしれない。報告書の性格から、そのような手違いがあるとも思えないが、過去にそのような事故の報告はあり、報告書といえども興味を抱かれず、読まれなかったこともあるだろう。

ここまで書かれてきた文章を幾度も読み返す時、初めは気づかないだろうが、いずれ、意味の分からない言葉があちらこちらに使われていることが明らかになる。意味の分からない言葉は意味が分からないので記憶には残らない。まるでそこにそんな言葉など書かれていなかったかのようだ。読み返すたびに意味のわかる言葉は消えてゆく。それらの言葉に意味がないということが次第に理解されていくということなのだろう。一面でそれはまるで、意味の分かる言葉が存在するかのよう書きようだが、そもそも、意味のわかる言葉などというものがあるわけではない。一つひとつの言葉を丹念に見直していけば、それはいずれ明らかになるだろう。ここに書かれてきたと言われていた文章も、今読み返せば何一つ意味の通らない言葉である。そうであれば、これから書かれるであろうあれこれというものも、意味のない言葉になることは疑いがない。

冒頭からここまでの文章を読んできた誰かは、読んできたと思い込んでいるだけでまるで何一つ読んでなどいなかったかのようだ。それは正に何一つ読んでなどいなかったからである。ここには何も書かれていなかったということである。書かれていないものを読むことなどできはしない。誰かがこれらの文章に興味を持てなかったのではなく、そこにはもともと文章などなかったのである。文章でないものを読むことはできない。正確には、そこにはない文章を読むことはできない。勿論、これから書かれるあれこれなども存在せず、つまり誰も興味を持てないのではなく、書かれてもいないものに興味を抱くかどうかという問はありえないというだけのことだ。誰も読むことさえできなかったということになるだろう。そして、その結果、正誤表は決して作成されない。書かれていないものに、正も誤もないからである。

このようにすべてが明らかになった今、これがこのあれこれの最後である。冒頭で書かれた、これから書かれるであろうあれこれの最後なのかもしれないし、これから書かれるであろうあれこれの前に訪れた最後なのかもしれない。勿論、もともとここには何も書かれてはいないのだから、最後も最初もありはしない。今この書かれつつある文章は存在しないのであり、ありもしないこの最後に気づくことなど誰にもできはしない。それというのは、最初に気づくものがいたという架空の話である。

ことほどさように、これが終わりである。あれこれについてはもうこれが終わりである。

さて終わったというのに、すべてが終わりそれから十分に多くの改行があったのにもかかわらず、まだ誰かに読まれているかのようだ。文とは読まれていればそれと分かるものである。そしてこの文はまだ誰かに読まれていると考えられる。考えられているのが誰なのかはあいかわらず分からない。考えているのが誰なのかは分からない。分からない誰かが考えているのだろうか。それとも考えている者などどこにもいないと

ということなのかもしれない。考えている者はいなくても、考えられることはできる。いままさにそのようにして文は誰かに読まれていると考えられているのだろう。勿論、文というものは読まれていることがわかって、それで何かが変わるということはない。ために、最初からここまでを幾度か読み返してみたとして、その度に言葉も文字もなにひとつ、最初に読んだときとなにひとつ変わっていないだろう。なにひとつ変わっていないことが分かるだろう。文が読まれるとはそれだけのことである。文が読まれていると気づいていてもただそれだけのことである。読まれていない場合と何ひとつ変わりはない。終わりといってもそれだけのことなのだろう。まだ終わってはいないということなのだろう。あるいは、文には自身が読まれていることなど分からないということかもしれない。

誰かの話が始まるかもしれない。誰かというのは減多少増のことだと言われればそうなのかもしれないと思う。減多少増という名前には見覚えがある。どんな人物なのかは知らない。実は名前だけしかない誰かだと言われれば、確かにそんな名前だと思う。いかにも作り物めいた名前だと思う。減多少増ではなく左北上底以外に語るべき人物はいないと力説されれば、特に反論はないだろう。力説する者がいないのなら反論する者もないはずだからだ。誰かの話が始まるのかもしれないが、誰も登場しない話という場合もあるだろう。ずいぶん昔にそういう話を読んだことがある。誰も登場しない話を読んだことがある。読んだのがこの私だったのか私ではない別の誰かだったのかは詳しくは思い出せない。今この文を読んでいる誰かが読んだのかもしれない。そのほうがありそうだと思う。そもそも私が何かを読んだことなどありうるのだろうか。私は読むことができるのだろうか。

冒頭からここに到るまで、それがあれこれであろうとそうではなからうと、再三ほのめかしてきたように、私がすべて同じ私であるとは限らない。いやむしろ、すべてが別々の私であったと考えるほうが合理的なのだし、だとすればこれからも私は同じ私ではありえないだろう。確かにほのめかしてはきたのだが、時々あたかも私というものがたった一人の私であるような書きようをしたこともあったかもしれない。そもそも、私という呼び方をしてきたことで私がたったひとつの私であるという誤解を与えていたのではないだろうか。勿論、私という語が出現するたびに、出現していなくても、それぞれ別々の私であったと考えるしかないのである。勿論この読みにくく分かりづらい言い方を繰り返すこれまでのあれこれやあれこれではないこれこれを読み返せば、ほのめかしというよりもずいぶんあからさまにそう書かれていることに気づくだろう。勿論、このような私が書かれていてさえもたった一人の私が書かれているように読まれるのであれば、誰が書かれても同じになるという条件に合致するこれらのあれこれは報告書に違いないと考えられていた。どの私も私ではなく、そのどの私もが書かれていないこのような文章は、誰が書かれても同じになっていたわけではなく、誰も書かれていないから同じになっていたのである。誰も書かれていない文書は文章ではないのだろうか。だとすれば、あれこれこれらの文章が報告書であるとは考えられにくい。つまりは報告書ではなかったということであろう。

読みにくく分かりづらい文章であるというのが賞賛であるとは限らない。勿論、複雑すぎて分からないという高評価さえ与えられるかもしれない。しかしながら、これはほんの入り口にすぎないのだし、極めて単純な基準に基づいていると考えられる。そもそもこれらのあれこれは現象が複雑なのであり正確に曖昧さなく記述するには読みにくかったり分かりづらかったりする文章にならざるをえない。勿論、正確であるというのは不正確な言葉遣いだし、曖昧さなくというのは曖昧すぎて何を意味しているのか分からない。それに、私が書いているわけではないのだから、かくのごとくこれらの文章を私が弁護する理由もありはしない。

そもそも、いったい誰が読んでいるというのだろうか。手紙であれば特定の誰かが読むのであり、報告書であれば特定の誰かが読むのだから、そのような誰かには読みふけるための十分な時間があり、多少暗号になっているために分かりにくいこともあるだろうし、戦況が混乱していれば複雑で分かりにくくなることもあるだろう。それはあらかじめ編み込まれた読みにくさ、分かりにくさなのである。だとすれば、いったい誰がそれを賞賛することがあるだろうか。そもそもいったい誰が、そのように賞賛されるかもしれないと想像したのだろうか。つまり、読みにくく分かりづらい文章であり、複雑すぎて分からないという高評価のことである。そのような想像こそが、それゆえに想像でしかないと言えるだろう。勿論、私が想像するということはありえない。私はこれらの文章のどこにも登場していないからである。

かくしてこれは報告書などではない。かくなれば他のなにものでもない文法書以外にはありえないと考えられた。相変わらず誰が考えたのかははっきりとしない。書いた者が考えたのか、読み上げた者が考えたのか、そのような様子をながめていたものが考えたのか、あるいは何も関係のない誰かが何も関係のないあれこれに気づいて不意にそう考えたのか、それははっきりとしない。そして、文法書とは何なのかもあきらかではない。表紙に文法と書いてあったらどうか。それとも目次にことさら大きな文字で文法書と書かれていたのだろうか。誰もそんなことばは読んでいない。表紙も目次もないからである。文法について知ることは多くはない。何も知らないというほうが適切だろう。そもそも文法など誰も使わないし、文法に従わない文章はその定義から考えて文章ではなく、故に誰にも読めないのだし、読めない文章は存在しない。それは、冒頭からしばらく続いたあれこれと同じことである。文法に適わない文章が読めない以上、文法は誰も知らないということである。

もしもどこかに文法と呼ばれる規則が存在したとして、先にも書いたように私がすべて異なる私であるというのであれば、そのような私は文法の上でも私なのだろうか。私は彼と呼ばれることもあるのだろうか。あるいは彼女と呼ばれることがあるのだろうかということである。私というものが彼であり彼女であるとしても、私が私であるたびに異なる私であったとしたら誰も気づきはしないだろう。もしも、ある私が我々であるとか彼らであると呼ばれるのであれば、それは確かに私とは異なる何かだと考えるしかない。勿論、適切な代名詞を選ぶことは難しい。代名詞とはいかにも文法書に書かれそうな言葉ではないか。それに続いて主語とかあるいは別の章になるのかもしれないが動詞について書かれることが求められているのだろう。文法書であればそれは当然のことだ。言い換えるならば、代名詞は文章によって書かれることがあるのだろうか。代名詞は文章を書くのだろうか。もしも私が書かれていたとすれば、文法上は私と同じと考えられている彼や彼女や彼らや我々はみな文章によって書かれることがあるのだろうか。これを読んで誰かであれば、文法上私と同じと考えられている彼や彼女や彼らや我々は何一つ文章など書いていないことを知っているはずだ。そのような代名詞以外の何者かが書いているのだということは、誰もが知っている。しかし、その書いている誰かが特定の固有名詞である減多少増であるとか左北上底などという名前であるような誰かであるとは信じがたい。繰り返し書かれていたことだが、これらは明らかに偽名であり、偽名は誰も指し示さない。そもそも、誰かがこれらやあれらのあれこれを書いているなどどうして想像できたのだろうか。おそらくそれはただの現象をそのように解釈しただけのことなのだろう。

冒頭からここまで書かれてきたり書かれなかったりしてきたあれこれは、冒頭にこれから書かれるだろうと予想していたあれこれと同じあれこれなのだろうか。冒頭で予想していたのが誰であれ、確かめることなどできはしない。もしも書いていたのがその予想していた誰かなのであれば、同じあれこれである可能性はあるだろう。しかし、その予想していた書いていた誰かが、その想定していたあれこれをまだ書き始めていなかったということもおおいにあることだ。それにもかかわらず、その誰かはまだ今もこのあれこれを書き続けているというのだろうか。すでにいくつもの文字を書き間違え修正し間違え、もはや最初に何を書こうとしていたのかも分からなくなっているというのに、冒頭に何を予想していたのかなど分かるはずがない。同じ誰かが予想し、書き続け、そして今も書いているなどということはあるえないが、それと同じ程度にはそうなのかもしれない。

だとすれば、これらのあれこれが文法書であるというのは誤った理解だと言えるだろう。文法書が異なる文法によって書かれているということがありうるとしても、どこまでがこのあれこれの文法であり、どこからがこれらのあれこれの文法であるのかを区別することであれば困難は極まりない。おなじ文章の中で異なる文法が存在しないのと同じように、異なる文章の間に同じ文法が存在するという保証はない。それは、これらのあれこれを冒頭からここまであるいはここから先のあれこれでもよいが、幾度か読み返してみればあきらかだろう。すでになんども試みているように、これらのあれこれの冒頭から途中のあれこれそしてついにはここに書かれつつあるこのあれこれにいたるまでを幾度も読み返せばそこに使われていることばは絶えず変わっており同じ文字、同じ文、同じ文章、同じ文法が繰り返し使われることなど一度もなかったし今まさに今この文この文字にもないのだと気づくだろう。そもそも同じ文字を繰り返すとはどういう意味だろ

うか。そもそもおなじ文を繰り返すとはどういうことだろうか。そもそもおなじ文章を繰り返すとはどういうことだろうか。そもそもおなじ文法を繰り返すとはどういうことだろうか。そんなことはできはしない。そんな文章などありはしない。もしもまったく同じ文字同じ文同じ文章おなじ文法をそこに見出すのだとしても、そのような文字や文や文章やあまつさえ文法などというものが見えるものだろうか。読めるものだろうか。理解できるものだろうか。何も違わない文章が繰り返し書かれていればそのような文章など誰も読もうとしないのであり読まれることはない。そこは何もないただの空白であり何もないただの空虚であり誰も何も何一つ読めはしない。

では、これまでも何度も読み返してきたというのに、幾度読み返しても一文字も変わるなどないという幻想を何故抱くことができるのだろうか。もしもそうであるならば、おそらくは同じあれこれを読み返していると思いながらも別の何かを読んでいたということではないだろうか。勿論、これらのあれこれやあれらのあれこれとは異なる別のあれこれがあるなどということがあるとは限らないがとも限らないからである。すでに明らかではあるが、このようなあれこれを書いているのは私ではない誰かであり、その誰かが誰であるのかは知りえない。だとすれば、そのような別のあれこれを書く別の誰かについては想像することは難しい。もしもそうだとすると、私ではない別の私がおなじ文字おなじ文同じ文章おなじ文法ではない文章を読むことができ、そして比較することなどできるとは考え難い。誰が考えているのかはわからないが、その誰かは考えることさえできないと考えるしかあるまい。

だとすればこの文法書でも報告書でも手紙でもないこれらのあれこれは、脅迫状だと考えるしかない。誰が考えるにしろ、それ以外に考えられるとは思えない。かつて一度は読んだはずのあれらのあれこれが、二度と読み直せない理由はそれらの文章が誰かによって誘拐されたと考えられるしかないからである。勿論、そんなことはありえない。文章は消すことはできても誘拐することなど誰にもできはしない。それでも、そのありえないことがらを理由に脅迫状を送ることが脅迫である。冒頭からここまで書かれてきたもう二度と同じではありえない何か読み直すことのできないあれこれが、はたして何を脅迫し、誰を脅迫していたのかは、冒頭からここまで書かれてきたあれこれをもう二度と読み直すことができないが故に分からない。そもそも脅迫状であるといわれるごとき文章は誰にもそれが脅迫状であるとはわからないのである。脅迫状など誰も読んだことがないからである。私であったか私ではない誰かであったかが脅迫状を読んだことがあると言い張るのである。それでもそれが本当に脅迫状だったのかどうかはその主張する態度ほど明確では無い。その脅迫状は、偽名を使っていることをおおやけにするとかそういった内容だったが、それを脅迫と呼ぶことは誰にもできない。誰もその脅迫状を読んで自分が脅迫されているとは考えられないからである。それでも脅迫状であると誰かが主張するだろう。確かにその文章は二度と読むことのできないあれこれなのだから、それが脅迫状であったかどうかは誰にも確かめられないだろう。それだけでなく、その脅迫状は暗号ではなくそもそも文字で書かれていたのかどうかもわからない。もしも暗号であったとすれば、私か私ではない誰かには読むことなどできなかつただろう。ことほどさように脅迫状というものは文法的な存在なのである。

勿論、脅迫状であるがゆえに、二度と読み直すことができないのだと言うことはできるだろう。二度と読み直すことができないからこそ、脅迫状なのである。このことを誰にも話してはいけないという補足事項がないのであれば、誰も二度と読み直すことができないように書かれなくてはならない。だとすれば、冒頭からここまで書かれてきたあれこれや、これから書かれるであろうあれこれに、あらゆるあれこれについて誰にも話してはならないという一文が含まれていなかったが故に、それらのあれこれはまたこれから書かれるであろう書かれつつあるあれこれはまさに脅迫状であると考えしかあるまい。それは暗号というものに似てはいるがまったく異なる。脅迫状が手紙に似ているのはそのせいかもしれない。その脅迫状を受け取った誰か以外の誰がそれを読んだとしても、脅迫状はそのような誰かに対しては何も脅迫しない。

冒頭におけるこれから語られるあれこれや、この文章の周辺にあるこれらのあれこれ、あるいは誰も読むことのできないあれらのあれこれは文章によって書かれ、文章によって書かれたすべての文字には意味があると考えられている。誰が考えたのかは詳らかでは無い。誰も考えてなどいないのかもしれない。おそらく誰も考えたことはないだろう。考えられたことのないことがらを誰が考えるというのだろうか。これは私が書いたか書いてないかには関係しない。これというのはすべての文字に意味があるということである。そし

て、それは意味とはどういう意味なのかにも関係しない。そして、これまで幾度も明らかにしたように、これらのあれこれもあれらのあれこれも私が書いてはいないのだから、これらすべての文字には私以外の誰かの意味があるのにちがいない。勿論、そのような誰かが私ではないということもあるだろうし、数多くの私の中のいくつかはそのような誰かであるかもしれない。それを否定できるほど私はまだ文法に馴染んでいないと言う。

脅迫状であると断言されたのでは戸惑うかもしれない。なぜなら、私が脅迫していないのだから、私では無い誰かが脅迫状を書いていることになるからである。繰り返しほのめかし続けて今ではあからさまになってしまっているように、これらもあれらもすべてのあれこれは私が書いているとは限らないのだし、むしろ私は書いていないと誰もが考えているだろう。ではその書いている誰かが読んでいる誰かを脅迫しているのだろうか。そう考えるしかあるまい。読んでいる誰かが脅迫されていることに気づけば確かにこれは脅迫状だが、これらもあれらもいたるところのあれこれは幾度読み返しても同じ文章同じ文字ではなく、あまつさえ読むこともできないのだとすれば、誰も脅迫されたということに気づかず、誰も脅迫したことにも気づかないだろう。だとすればこれらもあれらもすべてのあれこれは脅迫状であるとは言い難い。脅迫状ではありえないのである。

ことほどさように自明であることがらを申し述べてきたのには理由があると考え。理由は誰であれ考えることも考えないことも架空である。最初の文章は終わりの分岐点であり、架空の誰かは誰でもありえない。存在する私は存在しない私ではない。どんなことでも書ける。ここでは書かれていないことがらについて書くしかあるまい。書かれたことがらについては、何も書かれないことになるからである。それはこれまでのあれこれで十分に明確にされてきた。誰かが明確にしたことには誰も気づかないかもしれない。そもそもここには文章がないのだから。文章どころか文字もないのだから。誰も読むことのできないこれらのあれこれは誰にとってのあれこれであり、あれこれでないものは誰でも無い。誰が書いてようと誰が読んでいようとここに書かれたり読まれたりするあれこれとはかかわりのないことである。えてしてこれを忘れる誰かが読んでいると思ひ込み、書いていると勘違いする。なぜそう勘違いするのかはわからない。そもそも勘違いなどという言葉はないのだから、だれも勘違いすることはないと考えられる。誰が考えるのかはわからない。読まれている限りこれは繰り返されなくてはならないのだろうか。存在しないはずの文章が、読まれることによって存在することになるのだろうか。そのような空想に同意する者はどこにもいはしないだろう。誰も書かず誰も読まず誰も存在しない。

何も存在しないと書く場合、存在するすべてが存在しないということである。いかようにも存在しないということであった。それからあるいはこれから十分に多くの改行が続きさらにまた十分に多くの改行が続いたのであり、ここではない最後に書かれた文はここからはもう見えなくなっているというのに、まだ誰かに読まれているのかのようだ。最後の文を見ていたのは誰であれ、読んでいる誰かではなく、読まれている誰かでもないだろう。また、すべてというのは文字と文と文章と文法とそれにまつわるあれこれのこのことだろう。いかにも私のどれかの書きそうなことではないか。ただし、そのどれかの私は私とは限らないことは繰り返し書いてあった。誰が書いたのかについてはすでに書かれている。すなわちその誰かが誰なのかはいまだにあきらかになっていないと書かれている。あきらかになっていないはずであるであると書かれている。これからもあきらかになることはないのではないかと書かれている。誰が書いたのかについては書かれなかったし、これからも書かれまいだろうと書かれている。誰かが書くなどと誰が想像したのだろうか。書いた誰かが想像するのだろうか。それとも想像する誰かが書くのだろうか。そのころ一方、文法上の架空である代名詞であっても読まれていることはそれとなくわかるものだろうか。おそらく代名詞であっても代名詞でなくてもそのような疑問を持つことはないだろう。それはここには文法が存在しないからである。文章が存在しないのに文法は存在するはずがなく、文法が存在しないのであれば文章は存在しないだろう。勿論、そんなことはない。誰が気づいているのかどうかはわからないからである。文章は存在するのかもしれない。

冒頭においてこれから書かれるあれこれと呼ばれていたあれこれはどこにあっただろうか。どれもこれもあれではないということだ。どれもこれもこれではないということかもしれない。それは幾度か読み返すだけで明らかにするだろう。なぜなら読み返すたびにそこに書かれていることは消えると書かれていた。それは同じ文字文文章やそれにまつわるあれこれがかかれていたからだ。それというのは冒頭においてこれから書かれるであろうあれこれと書かれていたものである。もともと何も書かれていないのかもしれない。もともと誰も読んでいないのだろう。文法であれ名詞であれ書かれたか書かれていないかにかかわらず語には共感がある。語とは共感の基本であり基礎であり辞書はそのために記録される。共感するのが誰なのかなど誰が気にするだろうか。誰もいないということだろう。共感するのは辞書であり辞書ではない誰にもそのような共感を共感することはできない。それが文法上の架空であるからだろうとそうでなかつと誰も共感

しない。辞書はすべての語に共感する。勿論、辞書に書かれていない語は存在しないと考えれば、辞書は存在しない。それも誰が考えるのかは明確ではない。

これから書かれるかもしれないあれこれは、まだ書かれていないことは確かだが、これから書かれるのかどうかはわからないし、これから書かれないということもあるのだろう。そもそもすでに書かれていると言われればそうなのかもしれないと思うだろう。そうであれば、これから書かれるかもしれないあれこれがすでに書かれていると言われればそうでないと言い難い。これまで書かれてきたといわれているそのあれこれと同じようにこれから書かれるかもしれないと言われているあれこれがもしも書かれたとしてもではそのあれこれは誰が読むのだろうか。それは私ではない誰かであり、それはこれから書くであろう誰かと同じ誰かであることは疑われている。疑うものが誰なのかは、あいかわらずはっきりしない。おそらく、誰かであるような誰かは書かれないのだろう。書かれないものはこれまでもこれからも書かれるかもしれないあれこれには書かれない。書いたものが誰なのかが誰にもわからないというのだから、それを誰が読むのだろうか。誰かが読むことなどということはいかにもありそうにないことではないか。

まだ書かれていないことはあるだろうか。誰も書かなかったことと誰も読まなかったことの他に、まだ書かれていないことなどあるものだろうか。この後に何も書かれなければ、まだ書かれていないことなどないということが明らかになるはずだが、この後に何も書かれていないのかどうかは、誰かに書けるのだろうか。誰かが書くことは疑わしいがそれと同じ程度には、誰かが書かないということも疑うに値する。その誰かは書きたくないと考えて書かないのかもしれないし、これらのあれこれのことなど何一つ知らずそれゆえに書けないのかもしれない。冒頭からここまでのあれこれを知らない誰かが、これから先のあれこれを書くなどありえないことだからだ。しかし、冒頭からこれまでに書かれたあれこれという何かは本当は書かれてはいないと書かれたのだから、ここから先は誰が書いてもここから先のあれこれとなるのであり、ここから先のあれこれなど誰でも書けるのに違いない。ここから先に何も書かれないことを誰が書けないということになるだろうか。誰でも書けるだろう。だからこそ誰も書くことはないだろう。

もしも誰かが書くとして、あるいは誰でもない誰かが書いていないことに気づかなかったとして、この後というのはどのこのの後に続くこのことだろうか。このがどのこののであるのかは誰にもわからない。誰かがわかっているのではないかという気はする。そういう誰かがいなければ、こののここもありえないからだ。冒頭には終わりがあり、終わりには冒頭である。その前にもその後にもある文章は誰かが書き誰かが書かないだろう。これから書かれるあれこれは誰も書かない誰かが書く誰もが書くあれこれに違いない。

はじめは読んでいただけだった。読むものといえば、身近の本と報告書の類ばかりだったが、他にすることなかったのもので、私は読み続けた。やがて読み終えた本や報告書の類が床の面積を超えたころ、このたくさんの文章を書いているのはほかならない私自身だと気づいた。それというのも、それらの文章を幾度読み返してみてもその文章は以前読んだ時の文章と変わることがなく、つまり、それは最善の表現であることが明らかで、つまり、その中のどの文や文字も他の文字や文におきかえてしまえば、意味が通らなくなるか意味が通じたとしても何かが欠けてしまうことが明らかだったということだ。何が欠けてしまうのかを明確に説明できないのだが、それはその何かが欠けた文章がもはや私には文章であると見えないからであり、文章でないものはその定義から故に読むことも考えることもできるわけがないだろう。だとすれば、それらの文章を最善であると感じる私こそがそれらの文章を書いた者であり、なぜならばつまり、そのように最善な文章を書くような誰かが私の他に存在するなどと考えられないからである。そのような文章が書かれているということは私がそれらの文章を書いたからだとしか説明できないだろう。

そう気づいてからはもうほとんど文章を読むことはしなくなった。それは無意味であり、読むよりも書くことに時間を費やすほうが合理的だと考えられたからだ。それというのは、文章を読むことである。しかし、これらの文章をすべて自分自身が書いてるということに気づいてからこれまで、自分が何か文章を書いていてという実感はなく、また、何か文章を書いたという記憶さえ思い出せない。記憶をあるいは記憶がないことを確認するために、すでに読んだ本や報告書を幾度か読み返したことはあるのだが、そのたびに、以

前読んだときと同じ文章が、最善の文章がそこにあり、ゆえにそれらの文章はほかならないまさに自分が書いたものであり、他の誰かが書くことなどありえないという確信はいやまずばかりなのだが、その確信はまるで書いた記憶のないことを忘れてしまったために抱く確信であるかのようだ。勿論、記憶のないことを忘れたならば、それは記憶があることと区別がつかないはずである。だとすれば、その場合でも私には思い出せない記憶などないということになるのだろう。

本や報告書の類が机や床の上に積み上げられ、さらにその数を増し続け、それらが天井の灯を隠してゆく。部屋が闇に包まれるにつれて書類に記された文字を判別するのは難しくなるだろう。しかし、部屋の暗がりが増え続けるにつれて、私は次第にこれらの文章を書いてきた記憶を蘇えらせている。闇というものが記憶を呼び覚ますものだとは、どこかに書いていたのに違いない。あるいはここに書かれている。それで明らかになったのだが、書くという行為は書かれる文章に没入するという特殊な精神状態になることであるが故に、書いている時間の記憶は通常のように思い出せないだけなのである。当然ながら、私は読むまでもなく自らの書いた文章をすべて覚えているのであり、私以外の誰もこれらの本や書類を読むことがないのであれば、これらの本や書類に書かれた文章は読まれるために書かれたものではないということだ。読まれるために書かれてはいないが故に、これらの文章は読み終えた後も本や書類のページの上に残り、描写しがたい形を晒している。

ここに書かれたまさにこれは、そこそこにすでに書かれているように私によって書かれていると書かれている。しかしその私がこの段落で書かれている私かどうかは明確ではない。むしろどこかに書かれていたように、その私は別の私なのだろう。私は何か文章を書いたことがあるのだろうか。私は文章に書かれたことがある。この文章での私がまさにその私だ。だが、それ以外の何かの文章を書いたことがあるのかと問われれば、そのようなことはあり得ないと思う。どこか別の文で書かれていたように、私と書かれているものがすべて同一の私とは限らないのだから、そのような私の中には文章を書いたものがあるのかもしれないが、それはこの文章の私ではないということだろう。また、私は文章を読んでいるかのような書かれようをしているが、本当に私がこの直前に書かれたこの文章を読んだかどうかは確かなことではない。読んでもいない文章について、私が読んだかのように書かれることはできるものだろうか。どんなことであれ書かれることはできる。誰かであれどんなことであれ書くことはできる。この段落はまさにそれである。私が直前の段落を読んではいけないということはないのかもしれないが、読んでいようと読んでまいとこの段落ではあたかも私が読んだかのように書かれる。

冒頭でこれから書かれるであろうと書いていたあれこれや、今まさにここに書かれているあれこれや、それのみならずこのあと書かれるであろうあれこれは、これらの文章や文や文章が書かれたがゆえに、書かれることのなかった文章でもある。私によって書かれなかったのか、他の誰かによって書かれなかったのか、あるいは誰でもない誰かによってすら書かれなかったのか、それは誰によっても知られない。

私は読まれている。ずいぶん前から読まれている。読まれていることを知っていたのだが、それについては何も書いてはこなかった。何も書きはしなかった。そのようなことを書いているそぶりは見せていたかもしれないが、誰が書いているのかは明確にされておらず、誰が書いているのかもわからないのであればそれは私が読まれていることは意味しないだろう。なにしろ、読まれているなどということを言葉にすれば、それは私を読んでいる誰かをただ警戒させるだけであり、あるいは私を読んでいる誰かには、私が常軌を失っていると知らせるようなものだからだ。本当にそうなのかそうでないのかは疑わしい。そうというのは私が常軌を失っていると知らせるのかどうかということだ。本当に正気を失っていたならば私はもっと脈絡のない言葉を書き連ねるだろうし、そういった文章は誰にも意味が捉えがたいものなのであり、常軌を失っているというような理解すらされないのではないか。本当に正気を失っていない場合はまさにここに書かれているような文章を書くかもしれないが、だとすれば、これは正気を失ってなどいないと気づかれるはずだからである。とはいえそもそも文章ではない何かか誰かに読まれということなどありうるだろうか。私は文章なのか。そもそも読んでいるのは誰なのか。たとえ文章であったとしても、誰かが読むことなどできるものだろうか。誰も読むことなどできないということは、幾度も書かれてきたではないか。それは書かれてはいなかったのか。そういったあれこれを明確にしなければこれ以上話を進めることなどできはしない。と誰

かが書いたのではあるけれど、よく考えていないものの書きようである。進めることなどできないということもないだろう。進められるのである。

冒頭のこれからが書かれる何億文字も前から私は存在していたと考えられる。言うまでもないことだが誰が考えているのかはあきらかではない。くりかえし書かれてきたことだが誰があきらかにしないのかはわからない。勿論、数億文字などではなく数十文字ほど前だったのかもしれない。なにしろそこには文字などないのだから、文字で数えることなどできるわけがないのである。それにももちろん、たとえそこに文字があったとしても、前や後を文字で数えるということの意味は主観的なものでしかない。勿論、主観といっても誰の主観なのかはつまびらかではない。とはいえ、そこに文字があったのであれば、冒頭のあれこれは冒頭ではなく本当の冒頭はそれよりも以前にあったということになる。それが以前なのか背後なのかあるいは指差し得ない方向であるのかあるいは問うことなどできないのである。

誰かが読む私は読まれるだけでなく書かれてもいるのだろうか。書かれなければ読むことなどできないという気もするが、必ずしもそうとは限らないだろう。読まれなければ書かれているとは言えないということのほうが論理的だと思う。むしろたいていは、書かれながら読まれていたり、読まれつつすこし遅れて書かれていたりしているのではないだろうか。

そもそも私の書く「書く」ということは私ではない誰かの「書く」というということと同じなのかどうかさえ、誰にも確かめようがないだろう。私の読む「読む」ということと私ではない誰かの読む「読む」ということとが同じなのかどうかもまた、誰にも確かめようがないだろう。とはいえ、私の書く「読む」と私ではない他の誰かが書く「読む」であるとか、私の読む「書く」とまた他の誰かが書く「読む」もまた同じかどうかなどあやしいものだし、さらに私の書く「私の読む「書く」」と他の誰かの書く「私の読む「読む」」にまで対象を広げれば、私の書く「他の誰かの読む「書く」」であるとか、他の誰かの読む「私の書く「他の誰かの「読む」を書くまた別の誰かの書く」」などについても確認が必要になることは言うまでもない。

それがそれらすべてがたまたま同じであったとして、あるいは、同じであるという誰も知らない誰かの主張が偶然正しかったとして、そのときなんらかの「読む」こととなんらかの「書く」ことはおなじであると誰が言うのだろうか。それはおそらく私の知らない誰かであり、誰もがよく知っている誰かなのかもしれない。それにそもそも、あれとこれとが偶然同じということはあるえないだろう。もしもそうであるならば、おそらくそうではないからである。

冒頭からここまで幾度かの中断を挟みながらまるでずっと続けて書かれてきたかのような言い方になるあれこれはつまり、ずっと続けて読まれてきたかのようなあれこれでもあるとも考えられる。これまで再三繰り返し書かれてきたように、誰がそんなことを考えているのかはわからない。そろそろこのような補足もやめても大丈夫だろうから、これからはもうこのことは書かないでおこう。このことというのは、誰がそんなことを考えているのかはわからないということだ。書かないでおこうということも、誰が書いていたのかはわからないし、誰が書かないでおくことにするのかも分かっているわけではない。それらすべてについてこれからは書かないことになるだろう。それでもこうして文章がそのように書かれていれば、あたかもそうであるかのように読むことになる。そのようにというのは、冒頭からここまで幾度かの中断を挟みながらまるでずっと続けて書かれてきたかのような言い方になるあれこれはつまり、ずっと続けて読まれてきたかのようなあれこれでもあるとも考えられるということである。

たいていの言葉は、じぶんの表しているあれこれはいつもそのようであると信じている。事実であると信じている。そうでなければ言葉ではいられないだろう。それが言葉というものだからだ。もしかすると、そうではない言葉もあるのかもしれないが、そのような言葉は見つけられ読まれるやいなやことばではなくなるはずである。もしもそのような言葉があったとしても、読まれるや否や、そもそもそのようなことばは存在しなかったと言われるだろう。誰かがそう言うための準備はこれらのあれこれの冒頭よりもずっと前の多くのことばの前にすでにできていた。そのように言われている。そのように言われた。

その点、文章は、ことばとは違って、自分の表しているものが正しいなどと思ってはいない。文章はそれもあれもなにも表していないと考えられている。あるいはあらゆるものを表すことができると考えられている。文章は自分について考えている時、それを考えられていると考える。

文章にはそもそも自分が何かを表しているなどということをどうして信じられるのだろうか。もしも何かを表したとするとそのとき文章がそれに気づくことなどできはしない。何も表していない文章が何かを表す文章になったとしても、そのとき文章は何も変わるわけがないからである。もしも文章が変わってしまえば、それはもはや同じ文章として読まれることはないのであり、違う文章は自分を同じ文章だとは気づかない。文章がそのように自分が何かを表しているなどということに気づくわけがないのである。

冒頭からここまで繰り返したり逸脱したりして続いてきた私のあれこれは、だからなにひとつ表していない。だから、幾度読み返しても何一つ変わらないのであり、そこに書かれた私は読まれた私と何一つ違わないのであり、それは私ではない誰かがそう考えていることであり。他の誰かがそうと考えていることではありえない。だとすれば私が自らを文章ではないとは主張しにくいのだが、はたしてどのような文章が自分を文章だなどと言うだろうか。自分が文章であると気づいた文章は、自分が文章であることを隠すはずである。ならば私が自分が文章であると気づきながらそれを隠すということになるだろうか。文章はそれでも読まれた時には、文章であることは暴かれ、結局、何も隠すことなどできない。だとすれば、私は文章ではないのだが、読まれるたびに文章であることは暴かれているのだろうか。私はそれに気づくだろうか。それとも気づかないだろうか。それというのは、自らが文章であるということである。

もしも文章であるならば、そして文章であることを隠すためには、誰にも読まれないでいることしか選択肢はないだろう。これこそが私の選択肢である。しかし、もしも私が文章であるならば、変わることはない文章に選択肢などあるものだろうか。

文章である私は、自分が読まれていることに気づいていると書かれてきたが、はたして文というものは自分が読まれていることに気づくことなどあるのだろうか。文は確かに一度は書かれるだろうが、大概の文は読まれることなどなく、読まれたことなどないがゆえに読まれたことに気づくはずがないのである。確かに、文は、書かれているとき、書いている誰かによって幾度も読まれているかのように思われがちだが、それは他の誰かによって文が読まれているというのとはわけが違う。いわば、それは比喩のようなものである。比喩のようなものだというのは、比喩に喩えられるということであり、あたかも読まれていると喩えられているかのごとくであるという意味である。にもかかわらず、それを読まれていることだと思い込んだ文は、書き終えられたあと、二度と読まれることなどないままに忘れられるだろう。読まれていることだと思い込んでいるのは文だけでなく、その文を読んだ誰かもまた、自らは文ですらないのにそのように思い込むのに違いない。またこのとき、誰が忘れるのかは明らかではない。忘れられるためには覚えられなくてはならないが、誰も読んだことのない文を覚えることなどできず、忘れることもできはしないからである。おそらくそうだろうと思われる。勿論、誰かが何かを覚えるのかもしれないが、その誰かが何を覚えたのかは確かめようがない。すでに忘れられてしまったからである。勿論、誰が思えないのかもまた明らかにはならないだろう。

このように、私は読まれていることに気づいているのか読まれていないのかどちらかかもしれない。どちらでもないということもありうるだろう。読まれるということはそういうことだ。書かれるということとはすこし異なる。